

にて、鄭玄が詩箋に小なるを橐といひ、大なるを囊といふの橐なり、橐裝と連言すれば、直に旅行装荷擔の事になる、公劉（とうりゅう）の于橐于囊とある則旅行の事なり、駝は汎く六畜に物を負はするの稱なり、漢書には駝を佗（た）に作り、一馬を以て自ら佗負（たおひ）す（趙充國とあり、されば橐駝の名は、此獸に非ず、馬にあらす、別に一種也、もと健勁の性質ゆへ、遠方へ物を負はせて搬運せしむるの義と云るべし、

駝とはかりにて橐駝のことなり、すへに掲るを見て知るべし、いま荷物を幾駄（則駝といふも、橐駝よりきたるなり、駝は絶て駝と關からず、唐の懿宗咸通十二年同昌公主を葬る時に、其柩あり、是後世稱謂の起なるべし、

〔武江年表（八）〕文政四年辛巳六月、長崎より百兒齊（や）亞國（あ）の産駝駝二頭を渡す、閏八月九日より、西兩國廣小路に出して看せ物とす、（蠻名カメエル、又トロメテリスと云とぞ、（中略）肉峯は一ツにして、才牝七才といへり、○下略

〔視聽草 初集二〕駝駝 一名カメエル

凡長サ三間、高サ九尺、總身黄色、亞面利迦船積渡、（船主姓名ステツルト、○圖略

右ノ獸ハ紅毛國ニテ、百姓家ニ飼置、田畑ノ用ニツカウ、或ハ官人遠見ノ車ヲヒイテ、足ハ三ツニツレリ、道ヲ行事一日ニ百里ヲ走ル、荷ヲ積時、初膝ヲ折、重（サ）千斤ニ及ビ、足ヲ立ツ、食スル時一度ニ大食シ、四五日ハ物ヲ食セズ、ヤサシキケモノナリ、享和三年癸亥七月來リケレドモ、コンハヤア手印無キニ依テ、彼國へ積返シ、文政四巳ノ年江戸ニ來ル、（○中略

狂歌

首はつるからだは龜にさも似たり千秋らくだ萬ざいらくだ（○中略

加茂季鷹

眞顔

からうたを出てらくだもたんざくの三つにおれたるあしはらの國